

ざわつく日本美術 サントリー美術館 開館 60 周年記念展

サントリー美術館（六本木） 2021.07.14～08.29



絵画展覧会のある作品を見た時「えっ?」「おっ!」「うわあ・・・」など感じたことは無いでしょうか? 本展ではこうした言葉にならない「心のざわめき」を、作品をよく見るための大切なきっかけと捉えるという企画である。

今回の展覧会では、思わず「心がざわつく」様な展示方法や作品を通して、目や頭、心をほぐし「作品を見たい」という気持ちを高めて、当館所蔵の名品から珍品、秘宝まで、「作品を見る」という行為を意識して楽しみながら、日本美術のエッセンスを気軽に味わえるというユニークな展覧会である。

《色絵五艘船文独楽形鉢（底裏）有田》 18世紀(江戸時代) 重要文化財



五隻のオランダ船の文様を器の内外に配した作品で、底裏に「寿」の一文字が記されていて、当時の人々が海を越えて宝物を運んでくるオランダ船を「宝船」に見立てて尊んだことを踏まえると、この「寿」字は、本作の吉祥性（よいきざし・めでたいこと）を象徴的に表しているとも考えられる。

《袋法師絵巻》(部分) 一巻 17～18世紀(江戸時代)



絵画の場所は、屏風をめぐらせた畳の上で、女主人が胸に手をあてて辛そうにしている。

女主人の後の大袋の下から覗く男は、忍び込んだ法師で追い返えずことができず隠している。